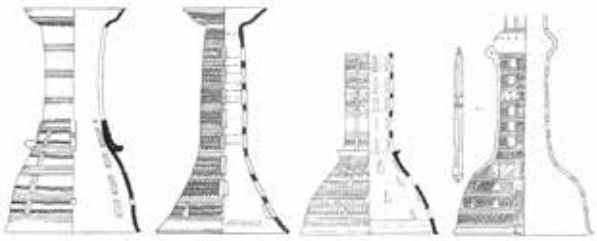
和歌山市楠見遺跡出土土器をめぐって
―関西大学文学部考古学研究室所蔵資料から―

木　下　　亘

昭和44年夏、楠見遺跡は関西大学考古学研究室によって和歌山市大谷にある楠見小学校校舎増築に伴い発掘調査が実施された。ごく限られた面積であるものの、出土した土器類の特異性から、遺跡の性格を含めその重要性が認識される事となった。報告書によると主な遺構は溝や落ち込みであったが、問題は大量に出土した陶質の土器にある。検出されたこれらの土器は、多数の大甕と鉢形器台を中心に、筒形器台・蓋杯・瑤・高杯・壺等があり、これらと共に土師器類も数多く出土した。出土品の中で特に注目を集めたものが大型鉢形器台である。極めて加飾的な土器群で、外面を鋸歯文、櫛描波状文、斜格子文、組紐文、櫛描十字文、円形浮文や蕨手状貼付文等で埋め尽くし、脚部の透かし窓にも通常見られる三角形、長方形に加え円形や半円形、レンズ形等を含む極めて特異なものであった。遺跡発見当時からこれらの土器群が、日本列島産須恵器であるのか、朝鮮半島からの舶載品であるのかは議論が分かれる所であり、報告書に於いても様々な可能性が指摘されている。又、これら一連の特異な土器群に対して楠見式という呼称が与えられ、普遍的な須恵器とは区別されてきたが、此処では地域色の強い初期須恵器として扱う。

今回、研究室に収蔵されている楠見遺跡出土品を詳細に観察する機会を与えて頂いたので、この過程で気付いた幾つかの所見に就いて触れる事としたい。

楠見遺跡の須恵器は、その形態を始め製作技法に於いても陶邑窯にはない独特な手法が用いられている。それは甕肩部に見られる乳状突起或いは胴部成形での横位平行叩きと言ったものである。特に胴部外面に見られる横位平行叩きは極めて特殊で、当該地域の大甕成形技法の目立つ特色と言ってよい。この手法は楠見遺跡を始め鳴滝遺跡、秋月遺跡等からもその出土が知られ、秋月遺跡からは、これに加え乳状突起を持ち底部に絞込み技法を有する甕が出土している。この特徴を持つ甕の分布はほぼ紀ノ川下流域に限定され、中でも北岸域にその集中が見られる。紀ノ川下流域から最も離れた出土地として奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡出土甕を挙げる事ができる。紀ノ川の水運を通じ奈良盆地南部域まで搬入されたと考えられるが、その出土量は限定的なもので、その供給先が盆地全域に及ぶものではない。



左から、楠見遺跡、陶邑 TK13号窯、奈良県葛城市竹内遺跡、韓国高霊池山洞古墳群　出土筒形器台

大型鉢形器台に関しては、鉢部口縁端部内面に断面三角形の突帯を巡らせる類例のないもので、その祖型は、韓国金海地域の鉢形器台に求められる。因みに口縁端部内面に突帯を持つ器台は、金海大成洞11・20号墳や鳳凰臺遺跡等でその出土が知られている。

研究室所蔵資料の中で先ず取り上げたい資料に、筒形器台がある。筒形器台は初期の須恵器から認められる器形で、陶邑窯跡群からもその出土が知られている。当遺跡から出土した筒形器台は筒部を欠失するものの脚裾部分に関してはほぼ全体像を知る事ができる資料で、復元によれば脚部径31.4㎝を計る。脚部は稜線により文様帯を区画し、その中に櫛描波状文を施文、文様帯内に長方形や円形の透かしが配置される。これらの諸点は一般的な筒形器台と大きな差はない。然し最大の特徴は脚裾上部から筒部にかけて縦方向に見られる帯状貼付け装飾にある。この装飾は恐らく４方向に配されるもので、その下端は膨らみをもって仕上げられている。筒部を欠失するため確定はできないが、筒部上方まで直線的に貼付けられていたと考えてよい。外面に貼付装飾を持つ筒形器台の類例を

探すと、日本列島の中では殆ど目にする事はなく、僅かに福岡県羽根戸出土の装飾付筒形器台や陶邑 TK85窯等が思い浮かぶに過ぎない。羽根戸、陶邑 TK85窯のものは動物など具体的事物を単体で貼付けるもので楠見の事例とは明らかに異なる。楠見同様の貼付文の事例が見られる地域として大きく二地域を挙げる事ができる。一つは朝鮮半島百済の地であり、もう一つは同じく大伽耶の地域である。此処で二つ地域の筒形器台を比較して見た場合、より楠見遺跡の事例に近いものは大伽耶地域の筒形器台にあると言える。百済地域の筒形器台に於いても同様の装飾は見られるが、筒部に比べて脚裾部が大きく発達するものが多く、当遺跡出土品とは形態上異質である。図に上げたのは高霊池山洞古墳群出土の筒形器台である。この様な貼付装飾は大伽耶地域の筒形器台によく見られる装飾手法で、図示した土器も筒部に同様の帯状貼付装飾が認められる。貼付け装飾細部の形状は異なるものの、その直線的に延びる形状や端部に膨らみを持たせる点等、類似する要素は多い。

以上の様に、楠見遺跡から出土した筒形器台は、その系譜を辿ると大伽耶地域の筒形器台からその影響の一端を受けていると考えられよう。

この様に楠見遺跡出土の須恵器は、器種により金海地域や大伽耶地域といった伽耶諸国の要素を部分的に取り込む形で生産された土器群と考えてよいであろう。

次に楠見遺跡から出土した類例に乏しい土器群は、一体どの時期に帰属するのであろうか。この点を探る手掛かりとして、共伴した一般的に見られる須恵器がそのヒントを与えてくれる。当遺跡でも陶邑窯で普遍的な須恵器資料の蓋杯・瓹・高杯・壺等が確認されている。これらの須恵器は、多くは細片となっているが、その時期的特徴を捉えるには充分な資料である。類例の少ない大多数を占める土器群の時期比定に対し、これらの須恵器が果たす役割は極めて大きい。

先ず蓋杯から見ていきたい。報告書に依れば杯類は合計５点が復元実測されている。杯身では土釜形に近いものや、口縁端部が水平に近いもの等が含まれ、杯蓋では、天井部調整が転箆削りである等、定型化以降の形態を示している。

瓹は小型・大型の両者が見られ、無文のものや口縁部や頸部・胴部に櫛描波状文を施すものがある。口縁端部は水平ないしは段を持つもので、その形態から見ても初期に位置付け得る瓹ではない。

この様に、共伴資料から見て楠見式とされる土器群の時期は、最古型式より後出する可能性が高く、TK216～ TK208型式に並行すると考えてよい。

楠見式土器の時期に関しては、従来から大甕肩部の乳状突起、胴部内面に丁寧に施されたスリ消し調整、底部内面に見られる絞り込み技法など、初期須恵器でも古相を示すと考えられてきたこれら特有の技法に引きずられ、実際より古く位置付けられてきた感が拭えない。特に、最初期の陶邑 TG232・231窯から出土した須恵器大甕に於いて、底部の閉塞に絞り込み技法が確認された事で、より一層その認識が強まったと言えるだろう。

又、楠見式の土器群は、一般的な須恵器とその色調面でも違いが見られる。楠見式の土器群は白味を帯びた白灰色を呈するものが多数を占め、青灰色という通常見られる須恵器の色調と異なる場合が多い。

以上、楠見遺跡の出土土器は、中枢窯である陶邑窯製品とは異なる部分が多く、当該地域での生産を強く意識させるものと言える。然し、出土量からしてもその生産は小規模で、その流通範囲は紀ノ川下流域を中心とした非常に限定された地域であった可能性が高い。

今回は、楠見式と称される紀ノ川下流域から特徴的に出土する一群の土器に就いてその形態や技法面での特色を抽出し、それと共にその時期や系譜を考えてみた。

近年、初期須恵器生産の可能性が考えられる地域は、資料の増加と共に増えてきており、その導入と背景に就いては地域毎に考えていく必要がある。何れにしても中枢窯としての陶邑製品と大きくかけ離れたこの一群の須恵器は、当該地域に於ける初期須恵器生産の実態を考える上で極めて重要な資料だと言えるだろう。

楠見遺跡資料実見に当たり米田文孝・井上主税両教授、渡邊貴亮・小木曽優佳両氏に様々な御配慮を得ました。記して感謝申し上げます。

奈良県立橿原考古学研究所　共同研究員